

雀切舌

井田 安雄

むかし、むかし、あるところにおじいさんとおばあさんがいた。
おじいさんが、スズメを獲ってきて飼っていたと。
おばあさんは腹の悪い人だった。川で洗濯をしてから、(布を糊づけしようというので)、糊をこしらえて縁側に置いて行った。
スズメが木の上から下りてきて、チョツ、チョツ、チョツと、糊をみんな食っちゃったと。
おばあさんは怒って、
「やいスズメ。糊をどうした」
といたら、スズメは、
「一口食べたろうまくって、二口食べたならなおうまくって、三口、四口でおいちゃった(終えちゃった)」
それでおばあさんはなお怒っちゃって、
「こんちくしょうめ、人がな、洗濯したら張るべえと思ってこしらえた糊を、食っちゃって」
って。それで、スズメをとつかまえて、銚はさみ持って来て、舌をはぎっちゃった。それでスズメは舌切雀になっちゃった。
それで、おばあさんはスズメをおほ放してやったって。
おじいさんが山から帰って来たらスズメがいなくて、
「ばあさんや、ばあさんや、スズメはどこへ行ったんべな」
「おれがこせえた糊をみんな食っちゃったから、舌切って、飛ばしてやっちゃったよ」
「ああ、かわいそうなことをした。なにがなんでも、舌まで切んなくてもよかったものを」
とおじいさんはこぼしたって。
それで、おじいさんは、
「舌切雀どこへ行った。舌切雀帰って来お。じいさんだぞ、じいさんだぞ」
って、山の中へめっけに行くんだって。そしたら、途中に、菜洗ってるおばあさんがいた。そのおばあさんに、スズメの家を聞いたら、
「この洗い汁を三杯飲めば教えてくれる」
といたんで、おじいさんが三杯飲んだら、
「この向こうの川へ行って、牛洗いどんがいるから聞いてみる」
っていったんで、おじいさんは、向こうへ行って、牛洗っている男に聞いてみた。
そしたら、
「牛の洗い水を三杯飲めば教えてくれる」
といたんで、おじいさんは牛の洗い水を三杯飲んだ。そしたら牛洗いの男は、
「ああ、そのスズメなら、あの竹藪はたで機織はたってるよ」
って、教えてくれた。
それで、おじいさんが、
「舌切雀どこへ行った。帰って来お。じいさんだぞ、じいさんだぞ」
って、舌切雀が機織はたしているところへ、めっけに行ったと。
そしたら、舌切雀がいて、
「おじいさん、まあよく来てくれた」
って、泣いて喜んだって。
おじいさんは、舌切雀にご馳走ちせうになって、帰って来ることになった。スズメが、お土産をというので、でっけえのと、ちっちちっちい葛籠くわらごを出して、
「どっちでもおじいさんの好きな方を持って行ってくれ」



と。そうするとおじいさんは、
「おれは年を取っているから、かありいほうさ持って行く」
と。小さい葛籠をもらって来た。

家へ帰ったらおばあさんが、
「何もらって来た」

と。いったんで、

「スズメに葛籠をお土産にもらって来たよ」

と。いった。葛籠のふたをとって見たら、金銀珊瑚さんごだの、いろいろの宝物が入っていた。

それで、おばあさんが、

「それじゃあ、おれももらって来る」

と。って。

「ばあさんや、日が暮れるから明日行け」

とおじいさんがいうんだけど、

「明日まで待てねえ」

と。って、おばあさんは一晩中、ひょこひょこ歩いて行った。おばあさんが、スズメの家へ着いたら、「よく来た」ずらあねえ、

「何来た」

とスズメにいわれた。

「おじいさんが葛籠をもらって来たから、おれももらいに来た」

それで、スズメは、でっかいのとちっちゃいのと、二つの葛籠を出した。

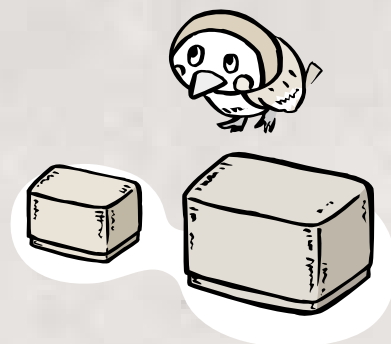
「おらあ、力があるから、でっけえほうをもらって行きてえ」

と。って、おばあさんは、でっけえ葛籠をもらって来たが、家まで待てないで、途中で口を開けてみた。

そしたら、宝物ずらあねえ、へび、ムカデや汚ねえ水だのいっぺえ出て来た。

おばあさん、びっくりして腰抜かしたと。

これで、おしまい。



あとがき

話者 桐生市新里町小林 大辻たけさん(明治32年生まれ)

「舌切雀」の話は、「桃太郎」「猿蟹合戦」「花咲爺」「かちかち山」の話とともに、五大御伽噺としてよく知られている昔話である。江戸時代以来、これらの昔話が特に注目され、特に明治時代以降は小学校の教科書にも採択されて、いつの間にか「五大御伽噺」として認定されたという感じである。

ここに取り上げさせていただいた「舌切雀」の話は、どなたでもご存知の昔話と思われるが、まとまった形でこの話をお聞きすることはあまりない。

ところが、大辻さんの「舌切雀」は、そうした中であって、よく整った形をしている。特におじいさんが舌切雀を訪ねて行く場面は、いかにも昔話らしい語り口となっている。

「じいさんだよ、じいさんだよ」と、舌切雀に呼びかけるところはたけさんの語る昔話の特色といえよう。途中で、菜洗いや牛洗いが出て来て、おじいさんに難題を持ちかけるところは、この「舌切雀」がよく整った昔話であることを示している。(この部分がおばあさんのところで欠けているのは、都合で話をはしょったためかも知れない)

ところで、大辻さんは前橋市東大室町のご出身とのこと。小林の祥雲寺(曹洞宗)に嫁がれて、小林の人になられたものという。

大辻さんのおとうさんの千太さんが話好きの人で、昔話は千太さんから伝承されたものではないかという。ご本人は講談が好きで、お子さんにも語ってくださいましたという。

私が大辻さんからお話をお伺いしたのは、昭和61年4月18日のことで、カケスの会の会員の皆さんに同行してのことであった。このときには、20話程のお話をお聞きして、「カケス通信」に収録させていただいている。

お話をお聞きしてから20年ほど経ってから、お話を公けにさせていただくことは、誠に申し訳ないことであるが、おわびとお礼を兼ねて発表させていただくことをお許し戴きたい。